

わたしの
好きなこと

旭川の北窓窯に学び、
独自に生活雑器を極める。



お猪口やカップ類など一部の作品は、ほろのペトナカイ観光牧場の「レストランポロ」、JR幌延駅内「ホロカル」で展示。



大皿／曜変天目(ようへんてんもく)

黒の奇跡とも呼ばれ、中国の南宋時代(12～13世紀)からある天目のうち最上級のもの。焼き上げる過程で黒釉(こくゆう)が変化し、漆黒の器に藍色が美しく輝く。



酒器／白土 青萩釉(あおはぎゆう)

山口県の萩焼に代表される青萩釉。青みを帯びたやわらかな発色が特徴で、渋さも感じられる。ちなみに竹岡さんはお酒は一滴も飲まないが、酒器をつくるのは好き。



花瓶／鷹栖粘土 耀雪釉(きせつゆう)

竹岡さんの陶芸の師匠である北窓窯の吉田時彦先生から分けていただいた粘土と釉薬でつくった花瓶。釉薬には大雪山の火山灰が含まれ、焼くと表面が荒々しくなる。



竹岡 政仁さん(64)

●昭和37年幌延町生まれ、幌延町在住。元幌延町消防署長。間寒別陶芸クラブ、中川町陶芸サークル所属。また、幌延町手打ちそば愛好会事務局長を務め、教育委員会主催の「チャレンジ教室」で手打ちそばを指導。幌延きってのスポーツマンでもあり、幌延町スポーツ推進委員長も務める。

夏休みの家族旅行で陶芸を体験

かれこれ20数年前、子どもがまだ小学生だった頃の話ですが、夏休みを利用して、毎年家族旅行に出かけていました。それがある年から、ただ観光するだけではなく「何かを体験しよう」ということになり、家族で旭川の『大雪窯』ではじめて陶芸にふれる機会を得ました。それが私と陶芸の出会いです。

同じようにある年『新得そばの館』で手打ちそばづくりを体験し、それ以来、今日に至るま

でそば打ちが趣味になり、現在でも毎週のように打っています。ちなみに全麵協の段位認定では4段を取得しています。

一方、陶芸からは、しばらく離れてしまっていたのですが、幌延町の消防署に勤めていた私が間寒別分遣所に異動(3年間勤務)になったことが縁で、その時の地域の消防団幹部から陶芸活動に誘われ、再び私の心に火が点き、陶芸の世界に足を踏み入れることになりました。

北窓窯の吉田時彦先生に師事

どうせなら基礎からしっかりと学ぼうと思ひまして、先生を探すことにしました。北海道で陶芸のマチといえば江別や旭川などが有名で、さまざまな窯元を訪ねるうちに、ついに師匠と出会うことができました。それが、旭川の北窓窯、吉田時彦先生です。奇しくも先生は私が生まれ

た昭和37年に築窯され、旭川の陶芸界の魁のような人でした。先生は郷土の鷹栖粘土や神楽美土を陶土にし、大雪火山灰の釉薬、耀雪釉をよくお使いになられ、私も分けていただきましたが、約4年、毎月1～2回、幌延から旭川へ通い、やきもののイロハから学びました。

残念ながら吉田先生は亡くなられてしまいましたが、形見分けといいますが、いくつか所有する作品は、今でも大切に工房で保管しています。

粘土や釉薬には特にこだわらず

現在の工房には、ろくろ、はありますが、窯(灯油)は手放し、私が所属する間寒別と中川町のサークルが利用している窯(電気)に便乗させてもらっています。本当は幌延や宗谷の粘土が使えればいいのですが、以前、幌延深地層研究センターが掘り出した土や、珪藻土を配合した粘土も考えましたが、粘

りがなく陶土には耐えませんでしたので、一般的なものを使っています。釉薬は藁白や青萩なども好きですが、これといった作風はなく、広い意味での生活雑器ばかりです。

展示は金田心象書道美術館でも

焼きの目安は、成形800℃、本焼き1250℃で、焼成後は各3日ほどかかります。陶芸の難しさや面白さも、焼き上がってみないとイメージ通りかどうか分からないところにあります。時には想定外なものができる。作品は幌延町文化祭での展示(約150点)をはじめ、時々、

金田心象書道美術館ロビーでも60点前後を展示し見ていただきます。



金田心象書道美術館にて。